

【陽明りの奇跡は、海の灯】



「……まじっく、あわー？」

エオルゼアに居た頃も、クガネに渡ってきてからも聞いたことがない単語でした。それでもウメさんが話す幻想的でキラキラしていて、私の臉の裏に映し出してくれるほど美しい色彩は、ひとえにウメさんが表現豊かな話し上手だからなのでしょう。

目を閉じて想像を膨らませるだけでも、私の頭と胸はキュンキュンしてしまいます。

「でもこれは、とても短い間しか見ることは出来ないんだ。温かいお茶の立てる湯気が冷めて消えてしまうくらいまでの時間さ。太陽が西の空に沈んで、辺りが真っ暗になる直前。ほんの数分とたったところかな。その極めて限定的で、流れ星のような儚さを持つ幻想に人は夢を見るものさ」

夢……。クガネでは昔から、流れ星が降ったその瞬間から消えるまでに願い事を三回言い終えることが出来たなら、その夢が叶うという迷信があるそうです。実際、流れ星が落ちる瞬間なんて瞬きひとつで終わってしまいます。一体どれだけの人が夢見たかわかりませんが、達成した人はいるんでしょうか？ きっといないでしょう。だからこそ、叶わない夢を私たちは見るのかもしれない。

「……あっ！ 茶柱が立ってるでっす！」

ウメさんが注いでくれたお茶に茶柱ひとつ。香りたつ湯気の間隙から、見事に人々の夢が立っていました。

「あたしは茶柱を立てる天才なのさ！ ほら、温かいうちに飲んじまいな。湯気が消えないうちに、ね」

ウィンクひとつ、人差し指と中指を揃えて唇に添えながら。

「あっちちちち！ わた、私猫舌なの忘れてたでっす……」

「ははっ！ そんなに慌てないの。お団子も置いてとくよ。ウチの名物団子、いくら食べても飽きないって有名なんだ。三色のボンってね！ サービス！」

ウメさんは楽しそうに三色のお団子をボンボンと、三本並べてくれました。春を予感させる桜色に、白雪を思う冬の装い、最後は新緑の瑞々しい夏色。……あれ？ 秋がない？ あきがない……飽きがない、わわ、頓知が効いているでっす！

「タタルちゃんは、会いたい人はいるかい……？」

「私の……会いたい人……」

「この後良かったら見においで。ウミネコの鳴き声を聞いて、あの遠くの水平線を眺めたら、マジックアワーをさ」

ウメさんはひとつ微笑んで、軒下に戻っていきました。

今も海猫の鳴き声が聞こえるこの場所は、【転魂塔広場】の大通りに面していて正面には勇ましいズイコウ像を臨む【ウミネコ茶屋】という場所です。海の玄関である【第二波止場】から下船し、お酒や食事を嗜む人々で賑わう【潮風亭】を潜り抜けると目と鼻の先に位置しています。

ずっと忙しくていつも通り過ぎるだけでしたが、着物美人の店主ウメさんのよく通る声と……ある噂を耳にしてついにやってきたのでした。

そしたら私のような珍客に、饒舌多弁なウメさんは興味を持ってくれたのです。最初は同じ着物を着ていたのもあって、帯の締め方やかんざしの話をしたりしました。すぐに打ち解けて、お話だけでなくお茶とお団子のサービスもしてくれました。

まるでずっと前から知っていた友人のように親しく話してくれたウメさん。最近では、マジックアワーを見るのが好きという話をしてくれたのでした。

「お？ 新顔だな、名前は？」

突然話しかけてきたのは、筋骨隆々のいで立ちからすぐにルガディンの方とわかりました。基本的にクガネの人たちはみんな気さくに話しかけてくれるのです。

「俺はジャクダン、毎日ここに来てる常連ってやつだ。よろしくな、タタル。今日もウメさん綺麗だなあ」

気もそぞろなジャクダンさんは、私との挨拶もそこそこにウメさんの方を見ていました。メガネの奥の目は細められ恍惚に近い表情です。

ちゃんとこちらを見て挨拶して欲しいものですよ、プンスカプンブン。

「ところでタタル。この裏メニューを知ってるかい？」

「裏メニューなんてあるんでっすか？」

初めて訪れた私には表メニューすらまだ全部知らないでした。

「奇跡の茶柱。17時から19時の間にしか頼むことが出来ない時間限定のメニューだ。なんでそんなこと知ってるかって？ そりゃあ俺はココが出来てからこっち、ずっとお世話になってるからよ」

どのくらい前にウミネコ茶屋はオープンしたのかわかりませんが、この時間帯はひょっとして先ほどウメさんが話してくれた夕方の時間。マジックアワーに関係があるのでしょうか。

「こんな噂を聞いたことないか？ ウミネコ茶屋では奇跡が起きる。それは再会の奇跡といわれている。今は表立って言わなくなっちゃったが数年前には

求める、奇跡志願者！ なんて触れ込みで人を集めてたんだぜ」

「そ、そうでっす！ その噂を確かめに今日来たんでっす。ウメさんからマジックアワーの話聞いて忘れる所んでっす。その時間には何か関係があるんでっすか？」

「マジックアワー？ ははん、確かにウメさんが好みそうな綺麗な言い回しだな。だがな、タタル……」

ジャクダンさんは少し声のボリュームを下げて、顔を寄せてきました。

「実際はこの夕暮れ時のことを、逢魔ヶ時ってんだ。あの世とこの世が混ざり合う時間帯、それは大禍に由来する。黄昏れ時とも言ふな。この時間は妖怪も跋扈する、神隠しが起きても不思議じゃあない。実際、行方不明者もいるらしいぜ……」

「こ、怖いでっす……」

「失礼。この往来で物騒な話をしているな、私も混ぜてくれないか」

突然話に割って入ってきたのは、これまた大きい身体の人でした。スイートグレイの袴にワインレッドの羽織り、そして鼻の所に横一文字の傷があるルガディンの人です。この出で立ちは赤誠隊の隊士さんで間違いありません。

「おおっと、キュウセンの旦那。ああ、この転魂塔広場一帯を管轄してる赤誠隊の人だ」

「お洋服でわかりました。こんにちわでっす」

「行方不明者、という話をしていたな。実は先日、この辺りで目撃情報が途絶えた行方不明者が出た。妙な噂話のことは知っているが……現実的ではないかと思ってる。二人も何か知っていたら教えてほしい」

行方不明者……？ そんな物騒なことが起こっていることに驚きです。号外に載っていたのでしょうか。少なくとも私は知りませんでした。

「ああ、すまない。これは緘口令が出ているわけではないが、個人的な依頼を受けただの。どうしても見つけてあげたくてな。聞き込みをしていた。私は転魂塔の前にいるから、いつでも声を掛けてほしい」

「俺も心当たりは無いんですが、わかりました旦那。何か聞いたら旦那に伝えますよ」

「よろしく頼む」

キュウセンさんはお辞儀をしてから持ち場に戻っていきました。

「そ、それより裏メニューでっす！ 奇跡ってどういうことですか？」

「ああ、奇跡っていうのは再会のことってさっき言ったな。例えば死別した人とか、行方が分らない人とか、想いを伝えられなかったとか、そういう今は会えないような人と再会することが出来るんだ。この裏メニューを頼むとな」

本当にそんなことが出来るのでしょうか。私は半信半疑でしたが、もしもそれが叶うなら大勢の人が押し寄せてくるような気がします。それで時間限定ということでしょうか。

「だが、これも絶対じゃあない。いくつか条件がある。一つ、奇跡を願えるのは一度きり。嘘をついて二回目を試すことはできない。二つ、その願いを試す為には、このお茶とお団子を頼まなければならぬ。三つ、注がれたお茶に茶柱が立った時のお、その瞬間は訪れるという。四つ、あちら側では必ず相手にお団子を渡さなければならない。五つ、完全に日が暮れて辺りが真っ暗になる前に相手に別れを告げなければならない」

条件が五つも……。茶柱が立った時しか訪れないというのも不思議です。あ、でもそういえばウメさんは茶柱を立てる天才って言っていました。あれは冗談かと思っていましたが、本当にウメさんは出来てしまうのかもしれない。それから、必ずお茶とお団子を頼まなきゃいけないというのも、なんだか可愛いです。

「でもジャクダンさん、もしかしら嘘をついて二回目を試そうとする人もいるんじゃないですか？ ウメさんもさすがに大勢の人のお顔を覚えているのでしょうか……」

「その場合は、絶対に茶柱は立たないそうさ。それが三つ目に掛かっていると、茶柱が立つかどうかは運次第。おまじないなんてのは当たるも八卦、当たらずならぬも八卦だろ？ そしてこの裏メニューを頼まなきゃ、そもそも奇跡すら起こらない」

「なるほどでっす……。しっかりお代も頂くところは私も暁の金庫番として共感するところがあるでっす。ただ、四番目。お団子を再会した相手に渡すというのはどういう意味があるんでっすか？」

「依り代、供物、奉納、神饌……まあ色々捉え方はあるが、願掛けには得てして必要なものさ。奇跡を願うなんて芸当、本当にお目に掛かれるなら神様にでも目こぼしをもらえなきゃ祟られちゃうよ」

なんとも東方のクガネらしいと思いました。私が生まれたエオルゼアの方ではそういったまじないに属するものは黒魔術系統で生贄といった怖いイメージがありました。でも本当に、ウメさんって何者なのでしょう。

ウミネコ茶屋の店主、茶柱を立てる天才、お話が上手なお姉さん……。

「問題は五番目だ。日が暮れる前に相手に別れを告げられなかったら……」

「告げられなかったら……？」

「消えちゃう」

「消え……え？」

「言っただろ？ この時間帯は逢魔ヶ時、あの世とこの世が通ずる時間。そのままあちら側に留まったら、もうこっち側に戻ってくることはできない」

「でもでも！ ちゃんとお別れをしたら、戻ってくれるんでっすよね！？」

「おうよ。みんな満足気だったぜ。だが、戻ってこなかった連中のことを俺は知らない。いや、覚えていないんだ。誰が奇跡を願ったのかをな」

「そんな……」

ウメさんから聞いたマジックアワーのお話……。

とてもキラキラしていて、ドキドキしました。この後、もう少しすれば夕刻の時間です。ウミネコの鳴き声を聞きながら、噂のマジックアワーを見ようとワクワクしていました。

でも一変して、この時間は逢魔ヶ時とも呼ばれていて、ちょっと怖くなってしまいました。奇跡を願えたならどんなに素敵なことでしょうか。それを求めてやってくる人も、きっとドキドキしているはず。だからこそ、どんなことにもリスクは付きものなのかもしれません。

ホントはありえないかもしれない、でもひょっとしたら起こせるかもしれない奇跡。私だったら、あの人と会うことが出来たら……。

「そこのお二方、すまない。ここが噂の【ウミネコ茶屋】かな？」

ぼうっと考えていたら、突然声を掛けられました。その出で立ちは、東方クガネの装いとは違い、かつてお世話になっていたイシュガルドの雰囲気を感じました。

あれ、この方どこかで見た覚えがあるかもです。

「ああ。あんた、珍しい恰好してるな。この辺の人じゃなさそうだ、旅行か？」

「ええ。家内と久々にイシュガルドから来ましてな。おや、そちらのお嬢さんは以前どこかで……」

イシュガルドと聞いて、思い出しました。冒険者さんたちとイシュガルドへ行ったときに懇意にしてくれた四代名家の伯爵さんです。名前は確か……。

「あ！ 思い出したでっす！ その節はお世話になりました。暁のタタルでっす。確か、お名前はデュランデル伯爵さん……？」

「いかにも。シャルマン・ド・デュランデル殿。長い間、国外への不信感を捨てきれなかったが、彼の……アイメリク殿の言葉で目が覚めた。時代は変わったのだな……」

デュランデル伯爵さんは、もともと怖い印象はありませんでしたがフォルトアン伯爵さんと同じで立場もあるので色々な苦労があったのだと思います。その重圧などはまだ少なからずあると思いますが、アイメリクさんの革命によって少しずつ前向きになれたのかもしれない。表情もどこか穏やかです。

「東方に良い温泉があるとエドモンに聞いてな。家内と足を伸ばしてみたのだ。湯役を退いて久しい。癒えぬ傷はあるが骨休めも必要だ。イシュガルドにも湯に浸かる文化はあるが、東方はまた違った趣があるという。それに……奇跡を乞うてみようとな」

「あんた……奇跡志願者か」

デュランデル伯爵さんは奇跡を願い、ウミネコ茶屋を訪れたみたい。そうであれば裏メニューのことをご存知ということ。イシュガルドにもココの噂が届いていることに驚きました。

どうやらデュランデル伯爵さんは今は一人のようです。奥さんは望海楼にいますのでしょうか。穏やかな表情ながら、眼差しは真剣です。

奇跡を願う人というのは、腰が据わっているといえますか……何か強い意志のようなものを感じますね。

「いらっしゃい！ お役人さんかい？ 珍しい恰好だね、ゆっくりしてってくださいな」

ウメさんが気づいてお茶を持ってきました。姿勢美しい涼しげな佇まいと、愛嬌のある可愛らしい笑顔、見ているこちらも頬がほころんでしまいます。

「“奇跡の茶柱、を、一つ”
「……もうそんな時間かい？ いいよ、ルールはご存知？」

ウミネコが遠くの方で鳴いています。気が付けば海も太陽を迎え入れようと、朱が溶け始めていました。照り返す陰陽が、ウメさんの横顔にも表れていました。

「改めて、お伺いしても良いだろうか」
「一つ、奇跡を願うことが出来るのは一度きり。チョンボは無しだよ。あたしは初対面だと思うけど、間違いないね？」
「ええ。遙かクガネに赴いたのも初めてだよ」
「二つ、奇跡の茶柱を必ず注文すること。これは今賜りました。三つ、彼の人と再会出来るかどうかは、茶柱が立った時のみ。ちょっとした願掛けさ、立たなくても恨みっこ無しだよ？」
「無論。我がイシュガルドにも、いや私の身内にもアルカナ占いが好きなやつが居て慣れておる」

デュランデル伯爵は苦笑しながらお代をウメさんへ渡しました。ウメさんは毎度ご最層に！ と言って笑顔を返しました。

「それから大事なこと。四つめ、これから渡すお団子は必ず相手に渡すんだよ。まあお守りだと思って。最後の五つめ、マジックアワー……綺麗な空が真っ暗になる前に相手にちゃんとお別れすること。いいね？」

「承知した。約束しよう」
「よろしい！ それじゃ、準備してくるからちよいとお待ちを。今日はもうオーラスだからねえ……」

ウメさんはヒラリと手を振って軒下へと戻っていきました。

夕刻、逢魔が口を開けて太陽を飲み込みました。ウミネコ茶屋から海の方を臨むと、潮風亭をまたぎながら水平線が見えます。なんと言葉で言い表したる良いのでしょうか……。空はラピスラズリの深さを、海面を映すサンストーンの淡さが溶けあって、フロアライトの煌めきが私の目を釘付けにしました。

私の語彙が失われてしまうように、綺麗なものが全て宝石の輝きでしか言い表せないことがとても歯がゆく思います。

「これが、マジックアワー……」
私たちの世界には美しいものがたくさんあります。そのどれもが、言葉では言い尽くせないでしょう。正直な気持ち、私を感じたことは綺麗過ぎて……“別世界にいるかのよう、でした。”

今ならこの美しさに吸い込まれて黄昏れて、あちらの世界に迷い込んでしまおうと言われても腑に落ちてしまうでしょう。軒行灯が淡く石畳を照らす中、ウミネコ茶屋もフロアライトの煌めきに包まれています。

「おまたせ」

気が付けばウメさんが戻ってきていて、八角形のお盆の上に急須と湯飲み、それから三色のお団子をお皿がありました。デュランデル伯爵さんの隣に腰を下ろして、伏し目がちに視線を落としています。

静かに凩いだ風がウメさんの横髪を弄び、軽く掻き揚げた仕草はとても艶やかでした。

「聞いてもいいかい？ あなたは、どうして奇跡を……？」

デュランデル伯爵さんは一つ大きく息を吸い込んで、静かに吐き出しました。視線は遠く、過去を見ているようでした。

「……二十年前、息子が行方不明になったのだ。今でも消息は掴めていない。当時、若くして俊英とまで言われた息子の武術指南を私は私にしていた。いずれはデュランデル家を担う男として育ててきたつもりだ。その折、外の世界も見せてやろうと見聞を広めるために旅をさせたのだよ。……それが間違いだったのだ。息子の乗った船はどこぞの海賊に襲撃されて海に沈んだ」

「……行方不明と言ったね。遺体は見つからなかったんだ」
「ええ。命からがら逃げ伸びてきた一人の男が事の顛末を教えてくれた。衰弱しきった彼も、治療虚しく数日後には亡くなってしまったが……。知らせを聞いた我々は、すぐに沖へ向かい無残な姿に成り果てた旅船を発見した。残っていた骸の中に息子はいなかった。おそらく、他の乗客と一緒に海に沈んでしまったのだろうと……」

デュランデル伯爵さんの表情は後悔を噛み締めるような、難しい顔をしていました。

そういえばフォルタン伯爵さんが言っていました。デュランデル伯爵さんは国外のことを信用していない保守派な男だって。ひょっとしたら、その一件以降デュランデル伯爵さんは変わってしまったのかもしれない。

「まだ早かったのだ……！ そう焦る必要などなかったのに、齢14という若さで俊英と持てはやされ私の方が驕ってしまっていた！ どんな苦境でも跳ね返せる訓練を課してきたと……。私は自棄になり現役を退いた。息子への申し訳なさと、自分の傲慢さに失望したよ」

「……息子には、会ってどうするんだい？」
「ただ一言、すまないと謝りたい。私の傲慢が生んだ過ちが、取り返しのつかない因果を引き寄せてしまった。ただもう一度、会って、謝りたいのだ……」

「そっか。二十年も苦しんだんだ、きっと息子も会ってくれるさ。思いは強い方が良い」

ウメさんはスッと立ち上がると、二枚のカードをデュランデル伯爵さんの前に差し出しました。

「どちらか一枚選んでちょーだい。引き直しはダメね」
「……こちらで頼む」

選ばれたカードをウメさんは人差し指と中指で挟んで、先ほどウィンクをしたようにそっと口付けた。

「それじゃ、湯飲みを持って。よく念じるんだよ」

もう片方の手で急須をもって、お茶を注いでいくウメさん。それをぼーっと眺めていると……。

「ほら、タタルちゃんも目瞑って。一緒に祈ってあげて？」
「は、はいでっす！」

わ、私も？ 咄嗟に返事をしてしまいましたが、デュランデル伯爵さんのお願いです。私も息子さんと会えるように、茶柱が立つように祈りますです。

「……いってらっしゃい」

その優しい声音は、私の耳にも届きました。慈愛に満ちた温かさは湯飲みを持っていない私を感じた幻想。

でも不思議と、茶柱は立ったのだらうと思ったのでした――。

どれだけの時間が経ったのでしょうか。耳に聞こえるのは、ウミネコの鳴き声ではなく、打ち寄せる水飛沫、波の音……？ クガネではここまで強い潮の香りはしませんでした。急に強い潮の香りがして、風が心地よい……。

片目を開けてみるとそこは、リムサ・ロミンサ……？

「父、さん……」
「カール、言葉で……カールなのか？」

目の前にいたのはデュランデル伯爵さんと、青いハットを被ったカールと呼ばれた男の人。

カール？ いえいえ、この人は私たちをクガネに送り届けてくれた船長さんです。カルヴァランさんです！ あれ？ デュランデル伯爵さんの息子さんはカルヴァランさんのことだったんですか？

「え？ え？ どういうことですか？ カルヴァランさん！ デュランデル伯爵さん！」
「……貴方はララフェル族の、タタル女史ではありませんか」

「カール、この子と知り合いなのか？ んん、どういうことなんだ？」
「父さん、で間違いないですよ……？ あの事件から二十年は経つでしょう。すみません父さん。まさか、こんな再会をするなんて思わなくて……。ここは一体どこでしょう、リムサのようで……夢の中にいるようです」

私もまだ混乱して頭が追いついていません。行方不明で、もう亡くなってしまっていたと思っていた息子さんに会いに来たデュランデル伯爵さん。それが、カルヴァランさんだったなんて……まだご存命のはずです。

「私が、お前に謝りたいと……奇跡を願ったのだ。行方不明になって二十年になる、もう死んでいると思っていたからな」
「そう、ですよ……。父さん、謝るのはわたしの方です。あの日のことを話さなければいけませんね……」

カルヴァランさんは目を閉じて、言葉を選んでいました。デュランデル伯爵さんもじっと待っています。

「船旅に出て四日目のことでした。【百鬼夜行】に連なる海賊にわたしたちは襲われたのです。積荷を狙った強奪が目的だったようですが、乗船していた人々は次々と殺されていきました。私も抵抗を試みましたが、船上での戦いは相手の方が慣れています。多勢に無勢、無念にも致命傷をくらい……わたしは瀕死の状態でした。もう殆どの人々が殺されてしまい、海賊たちは意気揚々と積荷を運ぼうとしていた時、大砲と聞き間違いうほどの轟音が船上の空気を揺らしたのです。わたしは目を疑いました、その轟音の正体はたった一人の扱う二丁の短銃だったのですから」

「その人は、一体……」
「今はリムサ・ロミンサの最高司令官であり、次期海賊王にもっとも近いと称された【シルバーサンド一家】のメルウィブ提督です。彼女は単身乗り込み大砲の様な銃声を轟かせながら、まるでワルツを踊っているかのように優雅に、二十人は居たであろう海賊たちをももの数秒で戦闘不能にさせました。提督の跳躍は凄まじく、船頭や帆柱を一躍で飛び回り、気が付いたときには百鬼夜行の船長以外は倒れていましたよ」

メルウィブ提督さんの武勇伝は数えたらきりが無いと言われていたのですが、この事件もきっとメルウィブ提督さんの武勇伝のほんの一幕なのでしょう。会ったら最後、あの轟音が三日三晩は頭から離れずうなされる、恐怖の相手だと誰かが言っていました。

今はもう優しくしてカッコイイ人でしたが、海賊時代のメルウィブ提督さんと会わなくて本当に良かったです。がくがく、ぶるぶる。

「薄れゆく意識の中でわたしは見ました、彼女の持つ銃はかつて海賊王の霧髭が持っていたといわれる愛銃【アナリアルレイター】と【デスペナルティ】でした。その二丁拳銃の銃口を覗かされる船長はきっと、打たれる前に伸ばされたことでしょう。わたしもそこで意識を失いました」

「だが、逃げ伸びてきた青年の知らせを聞いて私たちが向かった時には、お前の姿は無かった。ひょっとして……」
「わたしが目を覚ました場所は、リムサ・ロミンサのベッドの上でした。致命傷をくらったわたしの身体は当然すぐには動きませんでしたが、後から聞いた話ではメルウィブさんが介抱してくれたらしくここまで運んでくれたのだそうです。わたしは彼女の雄姿に惚れていました。憧れに近いものを感じたのです。だから……」

そこでカルヴァランさんは一度言葉を区切りました。そして、お父さんをまっすぐに見つめて……。

「ごめん、父さん……。身体が癒えたら本国に帰ることも出来た。けど、命の恩人であるメルウィブさんに恩返しが出来なかったんだ……。正直、父さんの指南を受けている時は家の古い風習なんて思っていたこともあった。ひょっとしたらこれは外に出る好機なのかもしれないって。でも、そんなことは言い訳でしかなくて……。そうじゃなくてわたしは……純粋に海賊になりたいと思った。初めて、わたしが成りたい自分を見つけたんだよ」

「そうか……そうだったのか……」

デュランデル伯爵さんは、空を見上げました。目を閉じた横顔は落胆しているようにも、悲しんでいるようにも見えました。

それはだんだんと陰が空を包み込もうとしていたからかもしれません。煌めきは失われつつありました。

「メルウィブさんはわたしに、引き金の引き方と舵の取り方を教えてくれた。身体の癒えたわたしは、どうしてもかつての得物を握ることは出来なかったけど、引き金を引くことは出来た。そして……メルウィブさんから言われたんだ。“君の人生を狂わせた百鬼夜行という海賊を、君が思う正しい海賊へ導いてほしい、と……。それからわたしは、内部抗争激しい百鬼夜行へ志願し入団。三年かけて百鬼夜行の頭領まで上り詰めた。これを成せたのも、他でもない父さんが教えてくれた唯一無二の信念“己が忠を尽くし、仁をもって義を成せ、って言葉が、いつもわたしを支えてくれたからなんだ”」

「……」

デュランデル伯爵さんは片手で顔を覆い、大きく息を吐きました。

「……ごめん、父さん。こんな身勝手な息子で」
「いいんだ、お前が謝ることはない。私は嬉しいのだよ……。カールが生きていてくれて、な……。ちゃんと、生きているのならそれでいい……」

デュランデル伯爵さんは決して落胆なんてしていませんでした。まっすぐにカルヴァランさんを見る目には少しだけ、光るものがありました。

とても優しいお父さんの顔を覗いていたのですから。

「はい……。わたしが頭領になる頃には、メルウィブさんはトライデントを制して提督の座を勝ち取っていました。もう大分遠い存在です、叶いませんよ彼女には、一生ね……はは」

カルヴァランさんもいつもの口調に戻っていました。

その横顔は夕暮れとともに陰を色濃くしていましたが、表情は裏腹にリムサ・ロミンサの雄大な海洋のように燦然としていました。

デュランデル伯爵さんも嬉しそうです。

「カール。すまないが、そろそろ時間が来てしまったようだ。奇跡と呼ぶには十分すぎる時間をもたらしてしまった。これを渡さなくてはな」

三色団子を手渡し、とうとう別れのあいさつの時がきたようです。名残惜しそうに、水平線を眺めています。

「……団子ですか？ はて、イシュガルドでは最近の流行りなのですか？」
「いや、今私はクガネという東方に来ていてな。それは土産だと思ってください
「クガネの……そうですか。ありがたく頂きますよ。父さん」

向き直り、親子は握手をしました。そこにはかつてあった後悔や、わだかまりなんかは感じられませんでした。再会の奇跡は、二人に和解という夢を見せてくれたのでした。

「カール。己が忠を尽くし、仁をもって義を成せ。……では、私は戻ろう。達者でな」
「……はい！」

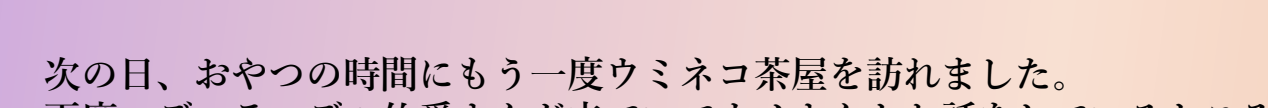
逢魔が空と海を飲み込む刹那、白光が瞬いて私たちを包み込みました。夢の奇跡はここで終わりのようです。さようなら、カルヴァランさん。また今度……。

「……おかえり」

気が付くと、ウミネコ茶屋の前に私は佇んでいました。軒行灯が薄ぼんやりと石畳を照らす中、見上げれば陽は完全に落ちていて一時のマジックアワーは消えてなくなっていました。

「わた、しは……あ、戻ってきたんでっすね」
「はいおかえり、タタルちゃん。もう暗いから帰りましょ」
「あれ？ デュランデル伯爵さんは、どこでっすか？」
「ああ、あのお役人さん。もう望海楼に帰ったよ。ちゃんと再会出来たみたいだね、良き良き」
「でも、あれ？ どうして私も一緒に向こうに行けたんでっすか？」
「さあて、何でだろうねえ。神様も気まぐれなんじゃない？」

ウメさんはいたずらに笑って答えてくれませんでした。不思議なこともあるもんです。
転魂塔からキュウセンさんが見守る中、ウメさんと分かれて私は大使館へ帰ることにしました。



次の日、おやつにもう一度ウミネコ茶屋を訪れました。丁度、デュランデル伯爵さんが来ていてウメさんとお話をしているところだったようです。わたしもテクテクと近くまで歩いていくと、二人が気づいてくれました。

「おや、タタル嬢。昨日は私の我儘に付き合わせてしまって申し訳なかったね」
「いえいえ、お気になさらずでっす」
「はい、タタルちゃんのお茶も置いておくよ」
「ありがとうございます。ところで、デュランデル伯爵さん。もうイシュガルドに帰るんでっすか？」

足元には大きな荷物が置いてありました。旅支度は済ませているようです。

「うむ。私の用事も済んだ、家内も私も東方の温泉を十分に楽しんだよ。エドモンに感謝しなくてはな」

長椅子に腰かけていた奥さんは、この名物団子に舌鼓を打っていました。こちらに気づき会釈をしてくれました。

「息子さん……カルヴァランさんと夢の中でお会いできて良かったでっす。もう、リムサに行けばいつでも会えますでっす」
「いや、昨夜家内とも話したんだが、わざわざ会いに行くことはなからう。カールも自分の人生を歩んでおる。私も牧場の手入れをこれまで通り続けていくさ、カールが生きているということが分かっただけでも、大きな奇跡だよ」

デュランデル伯爵さんの表情はもうすっかり晴れています。眉間にシワが寄るような気持ちは全然ありません。

「もちろん、いつ帰ってきてくれても構わないがね。さあ、そろそろ出立の時間だ。海芽殿、馳走になった」
「はい！ またいつでもどうぞ。ウミネコ茶屋はいつでもご利用をお待ちしてるよ」

デュランデル伯爵さんと奥さんは、第二波止場に向かって歩いていきました。

自分からわざわざ会いに行くことは無いと言っていたデュランデル伯爵さん。よっぽど嬉しかったのでしょう。確かに、二十年も消息不明で死んでいるだろうと思っていた人が実は生きていたら、嬉しくないわけはありません。それも、新しい人生を自分の意志で切り開いていたのですから。

カルヴァランさんも今はリムサ・ロミンサの民として生きていますが、その心はイシュガルドの、ゴルガニユの教えをずっと守っていくのでしょうか……。

「あの……奇跡、と言っていましたね。ここでは本当に奇跡が起きるんですか？」

振り返ると、そこには一人の女性が立っていました。どこか思い詰めたような、表情の暗い眼差しを湛えています。鮮やかな浅葱色の羽織り、表情の様に陰る灰色の帯を巻いて、短い髪と同じ墨を溶かしたような山袴姿の女性です。履物は綺麗に結われた草履で、まるでユウギリさんのような雰囲気でした。

同じ東方でも、少し装いが変わるのはこの地方だったのでしょうか。姿勢が綺麗で、お腹の前で組まれた手は育ちの良さを感じます。

「えっと、それは……」

私が言いあぐねると、ウメさんが気づいてやってきました。

「いらっしゃい！ どうしたんだい？ 立ってないでお座り。座るだけならタダだよ！」

「あの、店主さんですか？ 私、ここで奇跡が起こせるって聞いてきたんです。本当ですか？」

「おや、奇跡志願者だね。起こせるかと問われれば、あなた次第かもねえ。でも、その話をするにはまだちょいと早いよ。もう少し空が綺麗になってから話そ」

「え、空……ですか？」

「大丈夫、奇跡は逃げないからさ。せっかくの美人なのに、そんな顔してたら勿体ないよ？ 会いたい人が居るんでしょ？ なら、ちょっと温泉でも入って心を落ち着かせておいで、ね？」

論すように言ったウメさんは、浅葱色のお姉さんの方をポンポンと優しく叩きました。浅葱色のお姉さんは一度鼻をすすると、コクンと頷きました。

「……はい」
「タタルちゃんごめん、今休憩時間？ このお姉さんを、望海楼まで案内してあげてくれる？」

「あ、はいでっす！」
「あの私、何時までにくれば……！」
「陽が沈まないうちに、ね」

立てた人差し指と中指を口元に添えてウィンク一つ、ウメさんは軒下へ戻りました。

私は浅葱色のお姉さんを望海楼まで案内することになりました。転魂塔広場からは少し歩きますが、そんなに時間は掛かりません。大きな橋を越えて楽座街の奥に位置しています。

道中、そういえばと思い出した私は浅葱色のお姉さんの名前を聞くことにしました。

「お姉さんのお名前をまだ聞いてなかったでっす、私はタタルと申しますです」

「私はアズサ。古くは弓の材料として使われていた樹木の名前です。梓で出来た弓は神事に使われるほどなんですよ」

「素敵なお名前です！ アズサさんは、どうして奇跡を……？」

「……私には、年の離れた姉がいました。ですが、身体を壊し五年前に他界しました。早くに両親を亡くしたので、姉さんは小さい私の面倒を見ながら、とても無理をしていたんだと思います」

「そうだったんでっすね……。じゃあ、お姉さんに会いに？」

「いえ……あ、もちろん姉さんにも会いたいです、姉さんには結婚を約束した彼がいました。彼は反帝国運動を推進しているリーダー格の人でしたが、ある日突然、帝国に行ってしまったのです。姉さんを残して……」

「そんな……」

「私は許せませんでした。姉さんを裏切って、約束を守らず帝国に渡ってしまった彼のことを……！ 姉さんにも理由を話さずに行ってしまったみたいなので、姉さんはとてもショックを受けていました。でも、姉さんは最後まで愛する人の帰りを信じていた……。だから私は、姉さんの想いを無駄にしない為にいつか帰ってくるかもしれない彼を、代わりに待つことにしたのです」

アズサさんは、お姉さんへの想いと、彼氏さんへの憎しみで板挟みにされてしまいました。なんて苦しいのでしょうか……。あの思い詰めていた表情は、心の表れだったのです。

でも、あれ……？ 似たような話を、以前冒険者さんから聞いたような……。

「でも、実は最近……彼、帰ってきたんです。物言わぬ遺体となって……」

「あっ……。ひょっとして、アズサさん……ナマイ村の……」

「ナマイ村をご存知なんですね。そうです、私は紅玉海を渡った先の小オサード大陸にあるドマ国の麓……ナマイ村から来ました。先日、とある冒険者の方がいらっしゃって、ナマイ村近くのアオサギ川で、彼の遺体を見つけたと知らせてくれました」

そうです、思い出しました。私も先日、冒険者さんがクガネを訪れたときにナマイ村での出来事を話してくれたのです。

冒険者さんは、アオサギ川の下流で男性の遺体を発見しました。その方が持っていた手帳には「愛しき人へ」と書かれていて彼の無念が綴られていました。最後のページには、とある絵が描かれていたのだそうです。

その絵はどうやら想い人との約束の場所のようで、冒険者さんは相手の方に彼の無念を伝えるため、絵を頼りにその場所を探し回りました。その絵には一人の女性が写っていて、その人が彼の想い人なのだと思っていたのだそうです。

しかし、【約束の場所】らしき場所に辿り着いたとき、そこには絵に似た女性が立っていて……その女性は、妹だったのです。つまりそれが、アズサさんに違いありません。

「私たちの村は、ドマが帝国の属州化と共に侵攻を受けました。その時に両親も亡くなり、姉さんとの二人暮らしを余儀なくされました。帝国の重税に苦しみながらも、毎日毎日、姉さんは私にやさしくしてくれたんです。そんな折、反帝国運動を掲げる人たちが声を上げました。その中に彼も……陽泉さんもいました。きっと姉さんにはヒーローのように見えたのかも。村の中にはそんなこととするな、余計な事しても無駄だという声も少なくありませんでした。それでも陽泉さんは闘おうと言いつづけてました、結局皆に反対されることになって、極僅かに賛同してくれた人たちと一緒に闘ってくれました」

「そんなに勇敢だった人が、どうして帝国に行ってしまったんでしょうか……」

「分かりません……。姉さんにすら何も言わなかったんですから。冒険者さんが来て、手帳を見せてくれました。絵を頼りに約束の場所を見つけてくれて……。彼の遺体は姉さんが再会、アオサギ川のご神木の下に一緒に埋めてあげました。天で魂だけは陽泉さんが出るようになって、でも、私は……何も伝えられませんでした。姉さんの想いも、ずっと待ってたんだよって……。本当はご神木に土下座させるつもりだった、どうしてあの日姉さんを置いて行っちゃったのって問い詰めるつもりだった！ あなたが居たら、お姉ちゃんは死なずに済んだかもしれないのにっ！ どうして……いきなり手帳見せられて無念だったって言われても、私は！ 整理なんて付けられないよ！ もうグチャグチャで分からないの……この五年間、お姉ちゃんが死んじゃってからずっと、ずっとずっと！ 独りで待ってたのに……！」

「アズサさん……」

アズサさんの感情が溢れ出しました。両手で顔を抑えてしゃがみこんでしまいました。指の間からポタポタと涙がこぼれて、嗚咽が私の耳を叩きます。

五つ目の雫が地面を打つ時アズサさんは鼻をすすって、残りの涙は浅葱色の裾に沁みこませました。

「でも……私は、メッセンジャーになるって決めたから。姉さんの想いを伝える人になるって。だから、冒険者さんが教えてくれたクガネにある“奇跡のお話”を求めて、遥々紅玉海を渡ってきたのです。せめて、姉さんと陽泉さんの魂がちゃんと再会でできているのか確かめたいんです。それに、陽泉さんを一発引っ叩かないと気が済みません」

「はい……。アズサさんが、きっと会いたい人に会えるように私もお祈りしていますでっす」
「ありがとう。あ、泣いたらお化粧が……。温泉入って、お色直ししないとですね。タタルさん、道案内ありがとうございます」

アズサさんは赤く充血した目を細めて、無理して笑ってくれました。そのまま望海楼の受付に行き、姿が見えなくなりました。

私は、どうしてもアズサさんの奇跡の行方が気になってしまい、残務をテキパキを終わらせてもう一度【ウミネコ茶屋】へ様子を見に行くことにしたのです。

この時アズサさんが一つ、嘘をついていたことに私が気付けるはずありませんでした……。

「……綺麗。ナマイ村で、こんな綺麗な空を見たことなかったなあ……」

うみねこがなく頃に、私はウミネコ茶屋に駆け付けました。
アズサさんはイスに座って、美しい姿勢のまま潮風亭の向こう側に煌めくマジックアワーをぼうっと眺めていました。

良かった、まだ始まっていないみたいです。海を映す群青色の空が、地平線に沈みゆく山吹色の陽明りと溶け合って、黄蘗染色へと姿を変えていきました。これは失われた色、私たちは作り出すことが出来ない……禁断の赤みがかった黄色です。

そんな空にしか描けないような色が、まるで異空間に誘ってくれたかのようにウミネコ茶屋はマジックアワーに包まれていました。

「おまたせ。あ、タタルちゃんもおかえり。座って座って」
「はわわ、はいでっす！」

ウメさんに促されるまま、私も座ってしまいました。昨日の様に、八角形のお盆に急須と湯飲み、三色団子を載せていました。

ウメさんに促されるまま、ご相伴にあずかってしまいました。

「……さて。名前を聞いてなかったね」
「アズサです。由来は、梓弓から来ています。広義では樹木の名前ですね」
「おお！ 木王の名前を持つなんて素敵だねえ。どうりで納得役得！」

ウメさんが何に納得したのか分かりませんが、大仰に驚いて見せたので私は苦笑してしまいました。

「聞いてもいいかい？ あなたは、どうして奇跡を……？」
「私の生まれた村はドマ国の属州化に伴い帝国に侵攻されて、その時両親を失いました。姉と二人で暮らしていたのですが、姉も五年前に過労と心労で亡くなりました」

「……それじゃあ、家族に会いに？」

「いえ、私が出て話したい人は姉の婚約者です。正確には、婚約するはずだった人……ですね。彼は、反帝国運動を推進していたのですがある日、姉を置いて帝国へ行ってしまい何年も帰ってきませんでした。先日、彼が帰ってきたという訃報が届きました。村の近くの川で倒れていたそうです。彼の遺品の中に手帳があって、そこには無念と謝罪が書かれていました。でも……私は納得が出来ませんでした。姉さんを置いて行ってしまった彼を憎んですらいいました。だから、一発頬を引っぱたいて土下座を……なんて思っていたのですが、さっきタタルさんと話していて思い出したんです。私は姉さんのメッセンジャーなんだって。私の人生は、姉さんの想いを届けるためにあったんです」

アズサさんは朱色に照らされた横顔で、私を見やります。先ほど感情を爆発させてしまったアズサさんですが、温泉に浸かって落ち着いたのでしょうか。優しく儂げに笑う表情からは、落ち着いた風にも汲み取れます。

「そっか……。一つ、聞いておきたいんだけど、もしも奇跡が起きて姉の婚約者に想いを伝えることが出来たとして。あなたはこれから、どうするんだい？」

「……私の人生は姉に捧げています。なので、この一世一代の大仕事だけは、なんとしても伝えなければいけません。それが出来なきゃ、第二の人生も踏み出せないと思うんです。もしも、伝えることが出来たら……旅にでも出ようかな。ナマイ村しか知らなかった私ですけど、紅玉海を渡ってクガネにも来れたことで、意外と外の世界を見るのも良いかもしれませぬね」

ウメさんは伏し目がちで、アズサさんの話を聞きながら何かを考えているようでした。考えがまとまったのか、微笑みながら頷いて地面を見ながら言いました。

「……分かった。いいよ、あなたの想いしっかり届けてくるんだよ」

ウメさんはスッと立ち上がり、湯飲みをアズサさんへ手渡します。
時刻は18時、いよいよマジックアワーは深くつつじ色の陽明りが煌めきました。始まります、陽明りの奇跡が……。

「ルールはご存知？」

「いえ、詳しくは……」

「一つ、奇跡を願えるのは一度きり、嘘をついて二回目を試すことは出来ない」

「問題ありません」

「二つ、その願いを試す為には、奇跡の茶柱を頼まなければならない。ウチも商売だからね」

「もちろんです。奇跡の茶柱を、お願いします」

アズサさんは注文すると同時に、お代をウメさんに手渡しました。
ウメさんは、毎度ご最厚に！ と言って受け取ります。

「三つ、奇跡が起こるのは茶柱が立った時のみ。大丈夫、安心して。あたしは茶柱を立てる天才だから」

「ふふ、信じてお祈りしています」

「それから大事なこと。四つめ、再会を願った相手にこのお団子を手渡すこと。まあお土産だと思って、ついでにウチの宣伝もしてくれると嬉しい」

「分かりました。お約束します」

「最後に五つ目、マジックアワーが消えてなくなる前に相手に別れを告げる

こと。真っ暗になる前に言わないとダメだよ。もしも言えなかったら、こちらにはもう……戻ってこれないからね」

「……はい」

「よろしい！ それじゃ、どちらかのカードを選んでちょうだい」

昨日と同じように二枚のカードを差し出すウメさん。アズサさんが選んだカードは、デュランデル伯爵さんとは違う絵柄の方でした。

「こちらをお願いします」

選ばれたカードを中指と人差し指で挟み、口付けるウメさん。この所作は決まり事のようにですが、綺麗で目を奪われてしまいます。

「注ぐよ。アズサさんもよく祈ってね。はい、タタルちゃんも」

私も目を閉じて両手を組みました。湯飲みにお茶が注がれる音だけが耳に届いて、ウミネコの鳴き声もすでに止んでいます。今回も、きっと茶柱は立っているのだろうと何の根拠もなく思いました。

「いってらっしゃい。……元気でね」

慈愛の温かさを感じ、私の意識は遠く夢の中に溶け込んでいくようでした。次はどこへ行くのでしょうか。私も夢の中へ入ってしまうことをもう不思議と思わなくなっていました……。

水の音……。
水の流れる音、それから水が落ちて弾ける音が聞こえます……。
そして、この騒めきは木の葉。風に揺る木々がそれぞれに木の葉を揺らしています。私はゆっくりと目を開けると、そこには大きな滝と、それを受け止める小さな湖がありました。周りは木々に囲まれていて、ここが山の中だということが分かります。

「姉さん……。お姉ちゃん！」

アズサさんが急に駆けだして、一際大きな大木の所まで向かっていきます。その大木の根元には、アズサさんと似た格好の影が二つ立っていました。その片方がきつと、アズサさんのお姉さんのようです。

「梓……。どうして……。ここは、ナマイ村よね……？」

困惑するお姉さんをよそに、アズサさんは駆けだした勢いそのままに抱きついてお姉さんの胸に顔をうずめました。五年振りの再会です。

「お姉ちゃん、私……。どうしてもお姉ちゃんの想いを伝えなきゃって思って、クガネにある奇跡の噂を求めて旅をしたの。それで……。奇跡が起きた」
「奇跡……。そっか、これは夢の中と思えばいいのかしら。わあ……。あんな色をした空、見たことなかったわ。なんて綺麗な……。まるで紫陽花が空に溶けているみたい。でも……。そう。陽泉がこちら側に来たときは驚いたけれど、まさかあなたまで来るなんて……」

「陽泉さん……」

お姉さんが紫陽花と表現した桔梗色の空は、人工灯がほとんどないナマイ村では星の光がより煌めきを放っていました。この空間だけは陽明りの奇跡が包み込んでいて、その明るさは裏腹に、アズサさんの横顔には陰が差しています。

お姉さんから身体を剥がして対峙する視線の先には、ヨウセンさんと呼ばれた男性が立っています。

「梓ちゃん……」

しばらく見つめ合う時間がありました。ヨウセンさんの表情は暗く申し訳なさそうで、アズサさんの横顔には怒りとか、辛さとか、色々ごちゃ混ぜになった今にも泣き出しそうな表情が浮かんでいます。

そして、先に動いたアズサさんは何も言わずにヨウセンさんの頬を思い切り叩きました。乾いた鋭い音が空気を揺らします。

「ッ……」

ヨウセンさんは顔を伏せて痛みに耐えるように歯噛みしました。滝を横に切るように鋭く響いた乾いた音は、もちろんお姉さんにも私にも届いています。

「梓っ！」
「紫苑！ ……俺は、いいんだ。それくらいのことを、俺はしてしまった。君にも、梓ちゃんにも……。本当にすまなかった……」
「すまなかった、無念だった……。そういわれて、納得なんか出来ないよ！ どうして！？ どうして何も言わないで帝国に行っちゃったの！？ お姉ちゃんずっと待ってたんだよっ？ 結婚しようって言ってくれた陽泉さんの言葉信じて……。何も言ってくれなかったけど、いつか帰ってきてくれるはずだって……。何年も、何年も……。約束の場所であなただけの帰りを待ってたの！ 分かる！？ 何の連絡もなくただ待つことしかできなかったお姉ちゃんの気持ちがあッ！ 帝国の重税はひどかった……。お姉ちゃん、毎日毎日痩せてった……。それなのに私が食べる分に自分の分まで載せてくれたり……。一番つらい時に、あなたに隣に居てほしかった……。お姉ちゃんを支えてほしかった！ だからお姉ちゃんは、五年前に死んじゃった……。陽泉さんがお姉ちゃんをころ……。！」

「梓ッ！ ……ありがと、全部言ってくれて。ありがとね」

シオンさんがアズサさんの肩を後ろから抱き締めました。アズサさんは涙を流しながら、うなだれています。鼻をすする音と嗚咽だけが、ヨウセンさんを静かに責め立てています。

ヨウセンさんもそれが分かっているから、じっと受け止めているのでしょうか。

「……梓ちゃん、俺を許してくれなくてもいい。でも聞いてくれ、俺が帝国に行かなければならなかった理由を。話したところで俺の罪は消えないが、決して紫苑や梓ちゃんのことを蔑ろにしたかったからじゃないんだ」
「……」

「紫苑にも、ごめん……。生前、ちゃんと会って謝りたかった。俺が不甲斐ないばかりに、村に辿り着く前に力尽きちゃった。情けねえ……。帝国の侵攻時、君たちの両親が見せしめの様に殺された。俺は許せなかった。物を奪うだけに飽き足らず、人の命すらなんとも思っていない連中を……。反帝国運動を始めるうえで、帝国との交渉も無駄に終わることも多かった。そんな折、さらに重い税が課せられようとしたとき当然俺たちは反対した。もうこれ以上ナマイ村から吸い上げたら皆生きていけないっちゃまってな。だが奴らが卑怯だっけは、従わない場合反対してる俺たちじゃなく、俺たちの親しい人間を見せしめに殺すと言いついたんだ。そこに……。紫苑たちの名前も含まれていた。女子供は労力に乏しいから殺しても構わない、だが大人の男たちは労力になると言っただけ」

「ひどい……」

「ああ。俺はそんなこと、耐えられなかった。だから、俺を含め数人が帝国へ渡り奴隷となる代わりに、紫苑たちを殺さないで約束させた……。後に分かったことだが、奴らは重税をさらに引き上げたんだよな。悔しかった……。それでも！ 紫苑たちが殺されなくて良かったと思っていたんだ」

「でも、手紙や連絡をすることくらい……」

「無理だったんだ。帝国は物資、郵便、食料、すべての流通を徹底的に管理統制されていた。俺は奴隷同然に働かされていたが、全然隙を見つけられなかった。なんとか内側から何かを変えられないかと試みたが、ダメだった……。そんな生活を何年も続けていたが、一度だって紫苑と梓ちゃんのことを忘れたことは無かったよ。それでももう何も変えられない、何も変わらないと思いついた俺は、逃亡することに決めた……」

ヨウセンさんは突然、膝をついて拳を握って膝の上に置きました。まるで、武士が切腹をする前に精神統一をするかのように。

「もしも、約束の場所に戻る事が出来たら……。まだ紫苑が待っていてくれたなら、梓ちゃんを連れてナマイ村を出ようと思った。村の皆には悪いが、二人は俺の人生の希望だったから……」

「陽泉さん……」

「さながら俺は脱獄犯だ。向こうに残してきた村の人たちに恨まれても仕方ない。でも一世一代の大勝負、賭けるなら今しかないって思っただけ。結果は……。失敗。定期船に忍び込むまでは良かったんだが、下船の時に見つかった。山の中を逃げ回ったが、とうとう追い付かれて殺された。ナマイ村までもう少しだった……。持っていた手帳に残った力で文を書いて、誰かが俺を見つけてくれたらと思って風景画と写真を託した……」

それを、冒険者さんが見つけたのです。ここから先は、アズサさんも知る話でした。でも、え……。絵と、写真？

「ごめん！ 俺は何も成せなかった！ 紫苑を幸せにすることも、二人を迎えに帰ることも……。！ 許してほしいとは言えないが、俺が二人を大切に思っていたことだけは信じてほしい……！」

ヨウセンさんは頭を地面につけて土下座をしました。固く口を結んで見下ろしているアズサさん。

ずっと恨んでいたヨウセンさんのことを、許していいのかが闘っているのだと思います。どんな言葉を重ねても、アズサさんの心は癒せないのでしょうか……。

私は切々と訴えるヨウセンさんが、とても可哀想に思えてしまいます。

そこへシオンさんが、ゆっくりとしゃがんで声を掛けました。

「陽泉、顔を上げて。梓、あなたに話しかけてくれた冒険者の方。名前は分からないけれど、手帳に描かれていた風景画を見せてもらったのよね？」
「うん……。絵の場所を探して、私の所までやってきたの」
「なるほど……。そういうことだったのね。あなたは、陽泉からのメッセージは文と風景画だけだと思い込んでいたのよ」
「え……？」

思い込んでいたのは、きっと冒険者さんもそうです。私に話してくれたのは風景画だけだったのです。写真が入っていたなんて一言も……。

「これは俺が肌身離さず持っていた手帳だ。この隙間に……ほら」

ヨウセンさんが開いた一枚の写真。そこには、ヨウセンさんとシオンさん、それから今よりも少し幼いアズサさんが写っていました。

「これ……私の、十二歳の誕生日に撮った……。ハッピーバースデー、梓……」
「大きくなったな……。俺が帝国に行ってからもう十年が経つのか……。長い間寂しい思いをさせてごめんな……」

アズサさんは、口元を手で押さえて嗚咽を漏らしながら大粒の涙をこぼしました。

「ごめんなさい……。ごめんなさい……。私、陽泉さんのこと恨んでた……。陽泉さんも苦しくて、闘ってたのに……。ごめんなさい、本当にごめんなさい……」

シオンさんが、アズサさんの肩を抱き……。ヨウセンさんが二人を抱きしめました。

「いいんだ。俺は恨まれても仕方ない。もっと早く気が付くべきだったんだ。俺にとって、何が一番大事なのかを……。大切な人の守り方を間違えさしなればこんなことには……」
「私の想いが、こんなにもあなたを苦しめてしまっていたのね。梓、私の方こそごめんね。いつも助けてもらっていたのは私の方だった。あなたが居たからお母さんたちが居なくなっても、つらくなかったよ。梓が手を握ってくれたから、いつもお姉ちゃんって呼んでくれたから……。私をお姉ちゃんにしてくれてありがとう」
「お姉ちゃん……陽泉さん……」

みんなが苦しかったと思います。みんなが、辛かったはずです。誰かが誰かを想う時、ほんのちょっとすれ違ってしまった。でもそれは、みんな本気で誰かを愛そうとしていたからなのだと私は思います。

ふと気が付けば、空に煌めくマジックアワーがアズサさんの浅葱色よりも濃く深く染めていきました。そろそろ、時間が迫ってきているようです。夢の中では時間は有限です、作法に習いお団子も渡さなければなりません。

「アズサさん、そろそろ時間でっす。お団子を渡しましょう」
「あ、そうですね……。お団子は……」

アズサさんは鼻をすすると、私が持っていた三色団子を受け取って改めて二人の前に戻りました。

「えっと、二人にお土産です。なんでもお団子を渡さないといけないみたいで」
「ありがとう。じゃあせっかくだから、一つずつ三人で食べましょう」

シオンさんの提案に二人は頷いて仲良くお団子を食べていました。本人が食べてもよい物なのでしょう。とりあえず、渡したことに変わりはありませんが……。

こうして眺めていると、仲睦まじい家族のようです。羨ましいです。微笑ましい光景をしばらく眺めていると、いよいよ空も陽が落ちてしまいうまくない陰りを見せています。

「あの、アズサさん。最後に挨拶をしないと、日が暮れてしまいますでっす」
「……」
「……アズサさん？」
「タタルさん、私はもう死んでたの……」

え？ なにを言っているのですか？ 早くお別れを言わないと、戻れなくなってしまいますでっす。

「ごめんなさい、私……嘘をつきました」

嘘……？ なんのことでっすか？

「本当に奇跡が起こせたなら、私が会いたい人と再会出来たなら……。それはきっと幻想。でも本当に、そんなことが起こったなら私は……。もう現世には戻らないと決めていました」

え、アズサさん……。それって……。

「私はナマイ村を出て、船に乗って紅玉海を航海して……。その船が難破して本当は今、私の身体は海の底にある……。きっともう死んでいるんです」

ち、違います！ アズサさんはちゃんとクガネに来ましたでっす！ 望海楼まで案内しましたでっす！ シオンさんの想いを伝えるメッセージャーだって言っていたでっす！ 最後にお別れを言わないと、本当に戻れないかも……。陽が完全に落ちる前にお別れの挨拶を！

「……ごめん、もう声が聞こえないみたい。ありがとうタタルさん。さようなら……」

だ、ダメでっす！ アズサさん！ アズサさん！

定刻。陽が完全に落ちたとき、ありえないと思うほど滝の水が溢れて私の身体を飲み込みました。その黒い闇が大きな口を開けて、この世界ごと飲み込んでしまいました。

私の声も届かず、アズサさんたちの姿も遠く幻想の彼方へ吸い込まれてしまったように……。

「……タタルちゃん、おーい。もうオーラスの時間だよ」

私は目を覚ますと、ウミネコ茶屋の腰掛に横になっていました。飛び起きた私は、軒下に戻ろうとするウメさんの手を掴んで聞きました。

「あ、あの！ アズサさん……。浅葱色の服のお姉さんは、どこでっすか！？」
「……ん？ アズサさん？ そんな名前のお客さん居たかい？」
「え……。あの、奇跡志願者のアズサさんでっす！」
「変な夢でも見たのかい？ タタルちゃん。奇跡志願者は昨日のお役人のおじさまが来て以来、誰も来てないよ？」
「そ、んな……」

わけが、分かりません……。ウメさんは、アズサさんが来たことを忘れてしまった……？

あ、そういえばビャクダンさんが言っていました。戻ってこなかった人のことを、覚えていないって……。誰が奇跡を願ったのかを、覚えていないって……。

じゃあ、どうして私は……。覚えていないでっすか……？

「お母さーん！ まだー？」
「はいよー！ 今行くからちょっと待っててー！」

遠くから小さい女の子が呼ぶ声が聞こえます。あの子は……。

「うちの娘、海音だよ。元気な盛りだからねえ。待ちきれなくて迎えに来てくれたんだよ」

ウメさんは愛おしそうにウミネちゃんを眺めています。

「それじゃ、タタルちゃんも遅くならないうちに帰るんだよ。また明日」
「はい、でっす……」

積然としないうまま、私は心をどこかに置いてきてしまったかのように放心して帰路につきました……。

※ ※

「それは本当でっすか！ キュウセンさん！」

私は翌日、転魂塔広場を見回しているキュウセンさんから不思議な話を聞きました。

昨夜、望海楼に戻らなかった客がいと部署で話があがったそうです。受付のウシトラさんからの情報で、主人のカラクさんもこの辺りでは見ない顔だったからチェックアウトせずに帰ってしまったのだからと心配しているそうです。

一日だけの宿泊予定で、お代は先払いだった為営業に支障はありませんがもともと荷物も持っていないお客さんだったらしく、そもそも誰も泊まらなかったんじゃないかと思うくらいウシトラさん自身も混乱している様子みたいでっす。

「だが、私が腑に落ちないのは最後に目撃情報があったのが転魂塔広場なのだ。聞き込み調査で分かった。そもそも、荷物も持たずに旅をするだろうか……まったく不思議な人物だ。私はこの件も、例の行方不明者と同じ事件だと思っている」
「あの、その人って女性でっすか？ 薄い青っぽい上着で袴姿の髪の短い女性……」
「そうだ。ひょっとしてタタル殿も、その人を見たか……？」
「あ、でもたまたま通っただけなので、はっきりとは……」
「そうか……。何か分かったら知らせてくれ。よろしく頼む」

キュウセンさんは持ち場へと戻っていきました。私の心はザワザサして落ち着きません。やっぱり、昨日アズサさんは確かに望海楼にチェックインしていました。でも、転魂塔広場で消息を絶った。きっとそれは、奇跡の茶柱に関係している……。

でもそれなら、どうしてウメさんは奇跡志願者のことを忘れてしまうのでしょうか。ビャクダンさんの話では、戻ってこなかった人のことを、私たちは覚えていない、知るすべがないと言っていました……。ひょっとして、ウメさんは嘘をついている……？ それは恐ろしい想像でした。もしそうなら、意図的に異界送りのようなことが出来てしまうからです。でもでも、あんなに優しく気さくなウメさんが、何の理由もなくそんなことをするはずがありません。

ウメさんは、本当に何者なんでしょうか……。黒魔術でも、占星術でもなければ一体……。それこそ、禁術と言われる部類なのでしょう……。

「よっ。今日は朝から早いじゃないか、タタル」
「あ、ビャクダンさん……」

まだ営業前の【ウミネコ茶屋】は、閑散としていました。そろそろこの通りも賑わいを見せてくるであろうこの時間。ビャクダンさんもウミネコ茶屋に来たのでしょうか。

「どうした、浮かぬ顔して。この前、奇跡を目の当たりに出来たんだろ？ 良かったじゃないか、デュランデルの旦那嬉しそうだったぞ」
「違うんでっす……。昨日も、奇跡志願者が来たんでっす。でも……」

私は昨日の出来事を、ビャクダンさんに話しました。奇跡志願者が現れて、それがアズサさんという女性で……。結婚するはずだった人を待ち続けていたけれど再会は叶わなかったお姉さんの想いを伝えるために奇跡を願ったこと。

お姉さんは五年前に亡くなってしまっていて、許婚の彼のことを恨んではいたもののお姉さんの想いを伝えるメッセージャーであることを思い出して、ちゃんと伝えられたこと。そこには誤解があって、彼も帝国で苦しみながらも現実を変えようと耐えていたこと。最後は三人和解してアズサさんもヨウセンさんを許せたこと……。私が知っていることは全部、全部お話ししました。最後は、別れを告げることなく向こうの世界に残ることを選んでしまったアズサさんのことを……。ビャクダンさんは一つ大きく息を吐くと、腰掛にドカッと座りました。

「……そうだったのか。人にはそれぞれ奇跡を願う理由があるが、その人はもう身寄りもなく生きてるのが辛かったんだろうな。荷物を持っていないところを見ると大方、身辺整理も終わってたんだろげ……」
「問題なのはウメさんもそのことを覚えていないこととでっす。周りの人ならまだしも、ウメさん本人も忘れてしまうのでっすか……」
「タタルはまだ、オトヤさん……。ウメさんの旦那さんのことは知らなかったよな」
「旦那さん……？」

ビャクダンさんは突然話題を変えました。昨日、ウメさんの娘さんでウミネちゃんは見ましたが、旦那さんとはお会いしたことがありません。

「オトヤさんは五年前、ウミネちゃんが生まれる直前に亡くなったんだ。まだ二十四という若さでな。この前夕暮れの時間を逢魔ヶ時や黄昏れ時と言ったが、片割れ時……。という言い方もするんだ。夕刻、つまりウメさんがウミネちゃんを生んだ時、オトヤさんは目を閉じていた……。つまりウメさんは左手にオトヤさん、右手にウミネちゃんと両手に愛する人を抱くことが出来なかったんだ。生と死を、ウメさんは同時に経験しちまった……」
「……」

言葉に出来ませんでした。私はただ、ウメさんのやさしさが哀しみの先にあるものだったと知ったのでした。

ビャクダンさんが言った片割れ時という意味もなんとなく、分かってきました。奇跡を成就させて戻ってくる人もいれば、戻ってこない人もいる。ウメさんは逢魔に、片割れを連れていかれてしまったと……。

「ウメさんはもともと快活で豪快で、小さい頃から知らない人はいないくらい愛されている子供だった。結婚後、ウミネコの声が聞こえる場所でクガネの人たちに愛されるお店を開きたい。それが二人の夢だった。第二波止場から下船し、玄関口である潮風亭を潜ればすぐの第一等地、転魂塔広場に店を構えることができたのは本当にラッキーだった。身籠ってからも順風満帆で、幸せな人生を歩んでいたウメさんにオトヤさんの死は大きく陰を落としちゃったんだろう。ウミネちゃんが元気に生まれてくれたことが唯一の救いだった。オトヤさんのいない茶屋の切り盛りや、日々の生活に翻弄されながら段々と性格が大人びてきたっていうのかな。最近はずっと落ち着いた店主が板に付きちゃって、昔のウメさんを知ってる俺からすると少しさびしい気がするな」

「ウメさんはマジックアワーを見ると、とても寂しそうな顔をしていてっす……」

今ならその表情の意味が分かった気がします。あの綺麗な空の過去に、ウメさんはオトヤさんを重ね透かして見ていたのです。

私はもう一度、ウメさんとお話をしなければならぬと思いました。そんなはずはないと信じていますが、この奇跡の真相を……。

片割れ時、私はそろそろマジックアワーに包まれるであろう【ウミネコ茶屋】を訪れました。

今はお客さんも少なく、ビャクダンさんの他に二人ほどしか腰掛に座っていませんでした。

私が話をしたいウメさんは、潮風亭の裏に広がる陽明りを眺めていました。寂しそうな横顔で。寂しそうな影を映すウメさんの横顔と、煌めき始めた陽明りがとても対照的です。

「……ウメさん」

「あ、タタルちゃん。ごめん、ぼーっとしてた。今お茶入れるね」

「いえ、聞きたいことがありますっす。どうしてウメさんは、私にマジックアワーの話をしてくれたんでっすか？ ビャクダンさんから聞きました、オトヤさん……旦那さんが亡くなったこと。今でもオトヤさんの影をマジックアワーに夢見てる……。奇跡の茶柱は、本当はウメさんが作ってるんでっすか……」

「……そっか、色々聞いたんだね。順番に説明するよ。でも座って話そ、お茶入れてくるよ」

ウメさんはそうやって軒下へと戻っていきました。私は人のいない腰掛に座ってウメさんを待つことにします。

「おませ」

程なくして戻ってきたウメさんは、八角形のお盆とお茶、湯飲みを持っていました。まるでいつもの奇跡の茶柱のセットのようです。

「さて……何からだったっけ。ああそうだ、どうしてタタルちゃんに話したのかだったね。これは単純、タタルちゃんは他のお客さんとはちょっと違う雰囲気だったんだ」

「違う雰囲気……？」

「何て言うんだろうね……。神様の加護を受けているみたいというか、何かオーラみたいなを感じて綺麗だなんて。心当たりはないかい？ なかなかいないよ、加護を受けてる人って」

あるといえば、ある……でしょうか。私には超える力のような特別な能力はありませんが、もし加護のようなものがあるとすればきっと、ミンフィリアさんの……。

「誰かに守られているかも……という感覚はあるかもでっす」

「やっぱり。それはとても強い力だねえ。私はこう見えても、風水師なのさ。人の“気”は色で分かるの。だからかな、タタルちゃんの色もすごく綺麗なつつじ色に包まれてるから、マジックアワーと似てるなって」

つつじ色といえばやっぱりミンフィリアさんの雰囲気と似ています。私のことを、ずっと守ってくれる温かいものです。

「それから、音弥のことだね。音弥に見せてあげたかったなあ、海音のこと。……私たちは、クガネ生まれのクガネ育ち。私がやんちゃしてた頃は、全然目立たない男だったんだけど手が大きくて、優しく、誰よりも強い男だった。聞いてもないのに、あたしの前で夢を語るんだよ。クガネに皆に立ち寄ってもらえるお店を開きたいって。そこに君が居てくれたら絶対うまくいくって。私は風水の勉強をしてたから、商売のことは嫌だって言ってたんだ。でも、私もそれでプロポーズじゃん。音弥の夢は、私と一緒にお店をすることだったんだ。毎日、会うたびに、何度でも……あたしを求めてくれた。気が付いたら、あたしの夢になってたんだ。不思議だよねえ、押しに負けちゃった」

ウメさんは照れたようにはにかみました。今日はつつじ色が溶けあうマジックアワーが【ウミネコ茶屋】を包んでいます。

「結婚して二人でようやく、お店を開くことが出来た。ウミネコの鳴き声と、海が見えるこの場所で。クガネの皆も気軽に立ち寄ってくれて、決して悪くない営業が出来たと思う。ただ、やっぱり目玉になるような商品というか、ウミネコ茶屋限定の出し物が欲しいよねって思ってたのね。そんなとき、不思議な恰好のおじいさんと可愛い女の子のお客さんが来てね。おじいさんはメイスさんって言って、占星術というものを世に広める為に旅をしているんだそうだ。この時の可愛い子が、レヴェヴァちゃん。まだ十歳やそこらなのにすっごく大人びてて口調もあたしが同い年の頃と全然違うの！ おじいちゃん子なんだね、笑っちゃった」

レヴェヴァさんがこの東方まで来ていたとは驚きです。冒険者さんから話を聞いたことがありますが、大人びた態度は小さい頃も健在のようですね。

「その時さ、レヴェヴァちゃんが簡単なアルカナ占いを教えてくれたんだ。マイナーアルカナっていう三枚のカードを使った“願望成就、っていう占いをね。これは過去・現在・未来を司る絵柄が描いてあって、占った人の運勢を時間軸に沿って良い方向へ導くの。あたしはこれを教えてもらった時、閃いた。あたしの持っている風水術と掛け合わせたら唯一無二のものが出来るんじゃないかって！ あ、風水術についてちょっと説明すると――」

ウメさんは風水のことを全く知らない私に、簡単に説明をしてくれました。風水術というのは、陽宅――生者の空間である現世と、陰宅――死者の空間であるあの世を結び付け、良い気や悪い気の軌跡を導き局所的な空間を支配する術のことだそうです。簡単に言えば、色々なアイテムを使って入口を作り悪い気は陰宅へ、良い気は陽宅へ流すのですが、それはとても限定された空間にしか影響を与えないのだそうです。

例えば、全ての気は玄関から入ってくるとした場合、玄関に商売繁盛の招き猫を置く。すると良い気を招いて、悪い気は部屋に入らないようにあの世へ流してくれる。ということらしいです。

そして、占星術というのは過去と未来を繋ぎ合わせより良い未来へ導くために星詠みを使い、想いを成就させる奇跡を宿すものです。運命を切り開くという言い方を誰かがしていましたが、それは自分自身をより良い未来へ導くための星詠みということですね。

ウメさんはこの二つを掛け合わせれば、自分にしかできない「キセキ」を作り出せると思ったのです。

「実際に何を使うかっていうと、まずは三枚のアルカナと八卦鏡。奇跡志願者には目を瞑ってもらってるから、その間に作法に基づいて詠唱するよ。過去か未来の二択でカードを選んでもらう。それが過去であれ未来であれ、本人の後悔や心残り、未来への失望……そういった負の気が宿る。それを八卦鏡の悪い方角へ置くのさ、この時配置する方角は五行思想に基づいて決めるんだけど、ちょっとややこしいからここは省くね」

きっと聞いてもチンプンカンプンなので、素直に頷きました。私はお盆だと思っていたものが八卦鏡という鏡で、裏返しにしていたんだということしか頭に入っていません。

「でだ。その反対の方角に、つまり良い方角に選んだカードとは逆のアルカナを配置する。最後に残った現在のアルカナを……ん。あたしの理気を流し込んで、過去と未来を結ぶ軌跡の真ん中に配置する」

ウメさんはカードにキスをしました。まるでいつもウィンクをするときのような草草で、人差し指と中指を立ててカードを挟み口付けたのです。

「これで準備完了。あとはもう片方の手にも、私の理気を送り込んで……奇跡志願者と八卦鏡を結ぶ。そして、いってらっしゃい……って見送る」

握られた手から伸びる、白く美しい人差し指と中指はウメさんの芯の通った品行方正な姿勢のように見えました。それが今、私のおでこに下ろされています。

片方の手はカードを挟み八卦鏡へ、もう片方の手は奇跡志願者の方へ。ウメさんがその軌跡を繋ぐように……。

「あたしの力じゃ、空間を支配するといってもこの茶屋ぐらいいましか力は及ばないけど十分さ。マジックアワーの煌めきももっと大きく包み込んでくれる」

これが“奇跡の茶柱”の真相……。

つまり、ウメさんが意図的に作り出した奇跡。肩唾ですが、空間を支配してしまう力なら茶柱を立ててしまうのは造作もないかもしれません。

「最後の質問。あたしが作り出したかといえば、そうかもしれない。でも誤解しないで、あたしはルールのおかげで力行使してるの。無理やり異界送りみたいなことはしてないよ。みんなが願った奇跡の、ほんの数分間だけ夢を見せてあげられるだけ。もちろん、これは使い方を間違えば恐ろしいものかもしれない。選択は本人に委ねられてる……。けど、奇跡志願者の想いを蔑ろにしてはならない！ それが絶対のルールであたしの、キセキ請負人の務めだと思っから」

「……いえ、私はウメさんを責めるつもりはありませんでっすよ。むしろすごいと思いますっす。エオルゼアでは魔法という言い方をしますが、クガネでは奇跡……そうでっす、それは皆の願いを叶える奇跡だと私も思いますっす。ただ……私が心残りなのは、二つ目の質問……」

「……ああ。タタルちゃんは痛いとこ突いてくるねえ。そうさね、あたしは引きずってるかもしれない。でも、あたしの“奇跡風水”は自分の奇跡を願ってはならない！ それが絶対のルールだから……」

ウメさんは腰掛に静かに腰を下ろして、寂しそうに笑いました。辺りが幻想的な空気に包まれたとき、マジックアワーの時刻を知らせてくれます。奇跡風水は、ウメさんが作る海の灯です。絶対的なルールの上で成り立つ陽明りの奇跡。私はそのどちらも傷つけない方法を、もう知っていました。

「……私が、奇跡志願者になりますでっす」

「え……？」

「私の願いは、ウメさんとオトヤさんが幸せになってくれることとっす。ウミネちゃんが大きくなって、お父さんのことを思っても寂しくならないように。ウメさんはもう一度、オトヤさんと会わないといけないうでっす」

「で、でもタタルちゃん……あなたにも会いたい人がいるんじゃない……」

「私が会いたい人はきっと、帰ってきてくれると信じていますでっす。暁の灯火は、諦めない限り消えないんでっす！」

「けど、けど……奇跡は一回しか願えないんだよ……？」

「奇跡の茶柱を、お願いしますでっす！」

私は半ば強引に、お代を渡しました。ウメさんはじっと私を見据えると、大きく頷きました。

「……ありがとう、タタルちゃん。あなたに話して本当に良かった」

ぎゅっと握りしめたお代をポケットにしまっして、ウメさんは急須を持ちました。私も湯飲みをもって、注いでもらいます。なんだか、ちょっと微笑ましいです。

「やっぱりウメさんは、茶柱を立てる天才なのでっす」

「ありがと。ルールは大丈夫だね、カードを選んで」

「ウメさんの心残りは過去へ……。こっちのカードでっす」

「願わくば幸多き未来を……。理気を込めて、軌跡を繋ぐ」

「大丈夫です、きっと会えますでっす」

「行くよ……音弥……」

ウメさんの二本の指が私のおでこに添えられた時、陽明りの奇跡が瞬きました。

背後の小さな気配に気が付かないまま、私たちは光に包まれました――。

「……海芽、なの？」

聞き慣れない男性の声が耳に届いて、私はゆっくり目を開けます。

辺りはさきほどと変わっていない【ウミネコ茶屋】。……いえ、少し雰囲気は違うとすれば腰掛の数や日よけ傘が少ないでしょうか。

ここは、いつの【ウミネコ茶屋】……？

「音弥、音弥……！」

ウメさんは駆けだして、軒下の男性の所へ向かっていきました。あの人か、オトヤさんのようです。ウメさんの旦那さんであり、ウミネちゃんのお父さんの。

「どうして、君が……ひょっとして！」

「違う違う！ あたしは生きてる！ 海音も、ちゃんとね……」

「そっか……。安心した」

ウメさんの声色はすこし明るめに、音弥さんに話しかけます。五年振りの再会に抱き締め合っして、お互いに見つめ合っしています。

ビャクダンさんから聞いた話が去来しました。ウメさんはウミネちゃんを生むのと同時に、オトヤさんを亡くしてしまった……。両手に抱き締めたかった二人が、揃わなかった哀しみを背負いながら五年を生きてきたのです。話したいことはたくさんあるはずなのです。

「あたしの“奇跡風水”を使ったの。もちろん自分の奇跡は願っちゃいけないって覚えてるよ。でも、タタルさんが奇跡志願者になってくれたの。あたしたちの仲人を願ってくれたから」

オトヤさんはそれを聞いて、納得したようでした。私も鼻が高いです。

「ごめん、僕は海音を見届けることなく力尽きてしまったから。君一人に全部を押し付けてしまったね……」

「そ、そうだよ！ 毎日泣いたさ、海音も毎晩泣いた……。授乳期が終わるまで病気が心配だったし、ご飯も三人分用意したんだ。音弥は居ないのに！ あたしはガッツだから、女の子っほい飾りとか海音に付けてあげたかったけど、相談する相手もないし！ でも、カタコトで話せるようになってから早かったんだよ。ママとパパもすぐ覚えだし、これしたいあれしたいってすごく積極的なんだ。誰に似たんだろうねえ、あたしかな？ もうその頃には立ち上がろうとしてさ、一歳過ぎたくらいには立てるようになったんだ。それから、それから……！」

「うん……うん……」

ウメさんの話は尽きることがありません。今はもう五歳になったウミネちゃんの成長を、細かくオトヤさんに説明しては、怒ったり寂しそうにしたりと表情がコロコロと変わって可愛かったです。

普段の落ち着いたウメさんが見せる表情とは違い、ビャクダンさんが言っていたように昔の元気だったウメさんなのかもしれないと私は思いました。

しばらく可愛いウメさんを眺めていたい衝動に駆られますが、奇跡の時間は有限です。私は、ウメさんを現世に戻すという使命を自分に課しているのです。

そんなことを思っていたので、背後に近づく気配に気が付きませんでした。

「……おかーさん？」

「あ、海音……」

気配の正体はウミネちゃんでした。限定的な空間内に、海音ちゃんもいつの間にか入っていたのかもしれませんが。軒下のウメさんたちを不思議そうに眺めています。

思わぬ珍客に一瞬驚きましたが、ウメさんたちは真剣な表情になって見やります。

「海音、この人があなたのお父さん。見せたことあったでしょ？」

「おとーさん？」

「海音……」

五歳の女の子が初めて会うお父さんに、どんな反応を見せるでしょうか。写真の中だけでしか見たことなかった、もうこの世にはいない存在。

きっと今、ウミネちゃんの頭と心で目の前の人物を必死で掴もうとしているに違いありません。それでも、拒絶するでもなく逃げ出すことなくじっと見つめています。

「大きくなったね。お父さんらしいことを、何もしてあげられなくてごめんよ」

「会いたかった」

「……え」

「おとーさんに会いたかった」

ウミネちゃんは駆けて行ってオトヤさんにしがみ付きました。オトヤさんは膝を崩してウミネちゃんを抱きしめます。本当は叶わない奇跡がそこにはありました。

オトヤさんは涙を流しながら、強く強くウミネちゃんを抱きしめました。

「海音……海音……お父さんも、ずっと会いたかったよ……」

悔しかったのは、オトヤさんもだったのです。自分の娘を見ることなくこの世を去ってしまったことが……。そして、これから父親を知らずに育っていく海音ちゃんのこと……。

ウメさんも二人を優しく抱きしめました。ああ、本当にこれは奇跡です。ウメさんはようやく、大切な二人を両手に抱き締めることができたのです。ウメさんが願えなかった奇跡は、私の願いへと変わりました。そしてそれはここに、成就されました……。

陽明りの奇跡は、とても眩しく、とても色濃くて、みんなの想いを融和させてくれました。それは、とても優しいつつじ色を、みんなの想いを融和させてくれました。それは、とても優しいつつじ色を、みんなの想いを融和させてくれました。

あっ……。私がこの世界にこられたのも、どんな世界からも戻ってこられたのも、きっとこの瞬間の為なんですよ。ミンフィリアさん……？

【ウミネコ茶屋】を包み込むつつじ色のマジックアワーの煌めきが、ミンフィリアさんの優しさと同じ温かさを感じました。

「……ウメさん、そろそろ戻る時間です」

奇跡は有限。時にそれは残酷なお告げかもしれませんが、未来の為に私はそう切り出さなければいけませんでした。

「そうだね……。お団子を取ってくれるかい？ タタルちゃん」

「はいです！」

一本の三色団子には、三つのお団子が刺さっています。それをウメさんへと手渡し、オトヤさんへと届けられました。

「変わらないね、この味」

「変わらないよ、いつまでも……」

三人は仲良く一つずつ口に入れました。

「海音のこと、お願い。君がおばあちゃんになるまでここで待ってる」

「……やだ。あたしだけおばあちゃんになるなんてずるい！ 音弥もちゃんとシワ書いといて！」

「ははっ！ 大丈夫、笑い皺満載のおばあちゃんなんてすごい素敵だよ！ なんてったって僕の奥さんなんだから。海芽ならウミネコ茶屋も今以上に繁盛させられる。海音がもっと大きくなったら海芽と一緒にココを切り盛りするのが、僕の新しい夢なんだ」

「またそうやって勝手に……うん、分かった」

「あ、そうだ。君に渡したいものがあったんだ。出産祝いに渡すつもりだったんだけどね」

「わあ……胸飾り……」

濃い山吹色の金型には花卉が模られていて、そこから小さな蕾のような江戸紫の造花が千羽鶴のように垂れています。麻苧のようなものも付いていました。

ウメさんは贈り物をしっかりと受け取ると、大事そうに見つめてから早速身に着けました。

「うん！ やっぱり似合ってる」

「ありがと、大事にする。……それじゃ、あたしたち行くね」

「ああ、元気で。海音、お母さんと仲良くするんだぞー」

「うん」

「本当に行くからね……！ また、明日……」

「……いってらっしゃい。海芽、ここまで来てくれてありがとう」

夢の時間の終わりは、日没が教えてくれました。陽明りが収束する瞬間、二つの陰が重なって白光が【ウミネコ茶屋】を包みます。

戻りましょう、現世に……。

気が付いたとき、私は腰掛に座っていました。辺りは夜の静けさを迎え、空には星々が待っていたかのように一つひとつが輝いていました。

目の前で、ウミネちゃんと手を繋いで立っているウメさんがいます。ずっと遠くの、潮風亭の向こう側にある水平線を眺めながら。

「……ウメさん」

「気が付いたね。ありがとう、タタルちゃん。改めてお礼を言うよ！」

ウメさんの後ろ姿は、とても凛々しくて威風堂々とした姿は色々なものが吹っ切れた……そんな雰囲気を感じさせました。

「音弥の夢は、あたしの夢になった。あたしの夢は、いつかこの子と一緒にココを切り盛りすること！」

「きっと出来ますよ。ウメさんがもらった胸飾りのお花は、ムスカリといいます。花言葉は通じ合う心。そして……明るい未来」

「そーなんだ！ もう音弥もあたしが知らないと思って……実際初めて聞いたけど！ ははっ！ そっかー、そんな意味があるんだねえ！」

とても嬉しそうに笑うウメさん。屈託のない笑顔というのが、こんなにも清々しいと思えたのはきっと、これが本来の元気なウメさんだからなのでしょう。

「ウメさん！ またお茶を飲みに来てもいいですか？」

「モチのロン！ いつでもおいで！ 辛い時でも、悲しい時でも、嬉しい時でも、ハッピーな時でも。嫌なことがあったって、そんなもんは甘い団子とともに、熱いお茶で流し込んじまえばいいんだ。ウミネコ茶屋は、いつでもご利用をお待ちしてるよ！」

いつものウィンク一つ。

繋いだ手と、口元に添えた二本の指。

この先の未来を、月明かりよりも明るく笑顔が照らして――。



————The scenery seen by Tataru.

あとがき

改めまして、Final Fantasy XIV 新生5周年おめでとうございます！

皆さまごきげんよう。5作目も無事脱稿致しました。今年も予定カツカツで8月27日という日を過ぎてしまいましたが、来年からこそは……。という言い訳でございます、あとがきです。

今回も紅蓮秘話・幕間2「陽明りの奇跡は、海の灯」を最後までお読み下さり誠にありがとうございます。

紅蓮秘話の幕間という位置づけで、タタルを主人公に据えて番外編をお届けしてまいりました。今作で一応の終幕となります。

先日発表されました「漆黒のヴィランズ」が来年には我々の所にやってくるので、次回の6周年記念小話はまた違った舞台でお届けできればなと思っております。

さて、タイトルも去ることながら紅蓮の舞台を旅してきたタタル。短編という括りだからこそ出来る、短い旅の中に小さなメッセージを散りばためて執筆致しました。

神視点で書くことも出来たのですが、やはりタタル主人公で一人称で統一しようと思いきやなりました。今作は大きく3幕構成になっていて、字数でいうと3万字を超えてしまいましたので、短編というには読み応えがある文章量かなと思います。

私事ですが、最近よく知人の舞台を見に行く機会に恵まれて、その影響か会話劇の様にセリフが多いストーリー進行になりました。

役者さんのお芝居を目の前で、それこそ2、3メートル先で見ると背中だったり表情というのがとても印象的だったので、タタルにも登場人物たちにも一杯お話してもらいました。

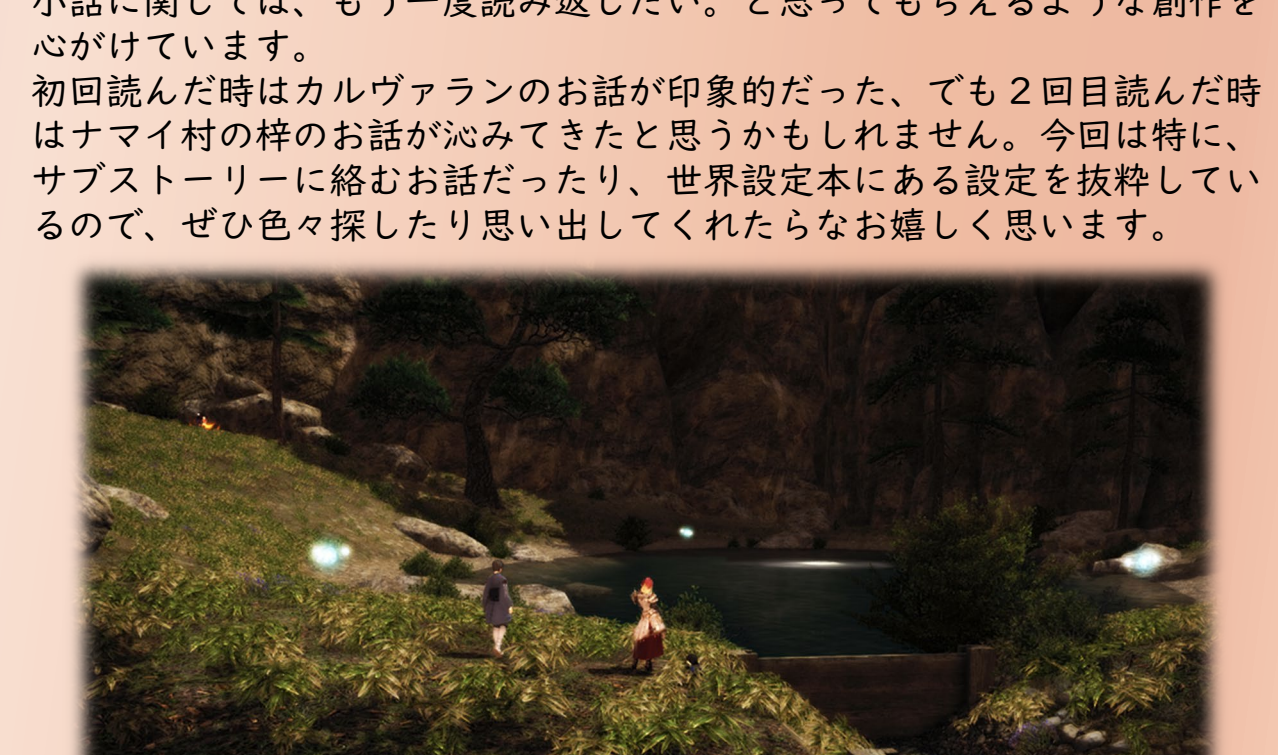
とはいえ、もう少し膨らませたいという思いも少なからずあったのですが、毎度言っているとおり私はすべてをつまびらかに明かしてしまうよりも、ちょっぴりの謎が残ったり、あれって結局何だったんだろうという種が時かかっていた方が読後感を委ねやすいと考えている書き手です。

なので、これは書き手のエゴなのは重々承知ですがどうぞ「行間も読んで欲しいな」と思っています。

でも今回は奇跡の茶柱のやり方までウメさんが話してくれたので、大体理屈は想像出来たかなあ……。

続きが気になって仕方がない！ という物語は、得てして一度読み切りの作品が多いです。コンセプトとして置く場合はそれを選びますが、FF14の小話に関しては、もう一度読み返したい。と思ってもらえるような創作を心がけています。

初回読んだ時はカルヴァランのお話が印象的だった、でも2回目読んだ時はナマイ村の梓のお話が沁みてきたと思うかもしれません。今回は特に、サブストーリーに絡むお話だったり、世界設定本にある設定を抜粋しているの、ぜひ色々探したり思い出ししてくれたらなお嬉しく思います。



さてさて、今回書きたかったことの一つ「マジックアワー」
皆さんはご存知でしょうか？ これは広義では夕方の短い時間のみ現れる現象を差します。

夕方の日没後の空が陽の光と、街の人工的な明かりが溶けあって薄明かりの短い時間にだけ見られる撮影用語です。写真を撮ってる方ならご存知だと思います。芸術的な空が取れてしまうという綺麗な画ですよ。

このマジックアワーと、逢魔ヶ時を掛けているわけですが個人的には逢魔ヶ時の方が好きだったりします。最初は妖怪とか絡めようと思ってました（笑
でもプロットが決まって物語が動いていく中で、眉唾になってしまったのでこのままウメさんのお話に寄せていく方が綺麗にまとまったと感じて、ウメさんの言葉で幕としました。

そもそも、クガネでロケハンしてる時にウミネコ茶屋を見つけて、ウメさんのセリフから構想が浮かんだので着地点はもう決まってるようなものでした。

ジャクダンさんや、キュウセンさんにもご協力頂いて配役を立てて、ウメさんのもってる過去を妄想して、転魂塔広場から見える景色がイイ感じだったので【ウミネコ茶屋】というバックグラウンドが出来上がりです。

あとはネタバレなので詳しくは書きませんが、風水のヒントはゲームの中で出ていましたし、ウメさんが風水師ならあーでこーで……。

特殊クエストで印象的だった「愛しき人へ」とか、カルヴァランさんの裏設定とか色々煮込んでみたら、奇跡風水の出来上がりです。

あとはタルさんと呼んで、ストーリーを歩いてもらうだけです。

タルさんが主人公ですが、ウメさんの物語だったなあとは思います。



書きたいことはたくさんあり、伝えたいこともたくさんあるんですが、全てを口から話さないでおきたいというジレンマと闘っております（笑

今回のお話も、読んでくれたあなたの胸に一つでも引っかかるものがあったらすごくうれしく思います。

最近はどうシナリオは前廣さんではないみたい？ なので、石川夏子さんに届いてほしいなー（なっちゃんに届けー！）という願いを込めて今回の小話を書きました！

ウメさんというNPCを作ってくれたであろう高柳さんもありがとう！

胸のブローチはきっと素敵なものに違いないですよ！

また創作が捗るNPC待ってます！

求む！ 奇跡志願者！ もとい、求む奇跡！

なんだか欲望丸出しですが、ここで筆を置きたいと思います。

改めまして、新生5周年おめでとうございます！

また来年の6周年は必ず8月中に、遅くとも新生祭に間に合うようにお会いしましょう！

漆黒のヴィランズの舞台で！

Ramuh鯖 Yuura.Erisell

【新生エオルゼア】

『[言行録](#)』

『[見聞録](#)』

『[近思録](#)』

【蒼天のイシュガルド】

『[蒼天秘話](#)』

2周年記念小話『[明かされなかった真実](#)』

3周年記念小話『[届けられなかった音義](#)』

【紅蓮のリベレーター】

『[紅蓮秘話](#)』

4周年記念小話『[始まりの狼煙は、紅い杯](#)』

5周年記念小話『[陽明りの奇跡は、海の灯](#)』

【Special Thanks】

[SQUARE ENIX](#)様

[Final Fantasy XIV](#)様

[FREE-LINE-DESIGN](#)様

And... You!!

[感想・連絡フォームはこちら](#)

この物語はFF14の二次創作物です。本編とは何ら関係はありません。
しかし、スクウェア・エニックス様より申し立てがあった場合は
即刻掲載を取り下げることをお約束致します。

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

Copyright (C) 2010 - 2018 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.